

(2)は符籙に続けて數文字が記されているが、墨痕が薄く判読できない。呪符と考えられる。

なお、木簡の釈読にあたっては、新潟大学の矢田俊文氏、上越市公文書館準備室の福原圭一氏、新潟県立歴史博物館の前嶋敏氏のご教示を得た。

(1)～(7) 遠藤恭雄、8 相沢央〈新潟市歴史文化課〉



新たな百濟木簡の出土

韓国木簡の研究は、これまで新羅木簡が中心であつたが、最近、百濟木簡の出土が相次いでおり注目される。

まず、韓国木簡学会発行の学術誌『木簡と文字』創刊号で、扶余・双北里ヒヨンネドゥル北浦遺跡から七点以上の木簡が出土していたことが公表された（李版燮・尹善泰「扶餘雙北里ヒヨンネドゥル北浦遺跡の調査成果」）。いずれも断片的な内容だが、「□率牟氏丁」など人名と丁数を列記したものや、「德率首比」という官位と人名を記した付札がある。

また、二〇〇八年四月、すぐ近くの双北里一八〇一五番地遺跡からも六点の木簡が出土した。これまでに公表された一点は、残存長約二九センチで表裏とも三段に分けて人名と石数を列挙している。同年七月には羅州・伏岩里遺跡から、百濟では初めての地方木簡が二点出土した。一点は残存長三三一センチあり、「中□四」など人の管理に関すると思われる内容が数段に分けて数十字記されている。いずれの木簡も、百濟の文書行政の水準を示す重要な資料であり、今後の調査・研究が期待される。なお、これら二カ所の遺跡についての報道資料は、韓国文化財庁ホームページで公開されている。

（橋本繁）